

加治・神前・畠中遺跡

—大阪府立貝塚高等学校本館棟改築に伴う発掘調査—

平成 28 年 3 月

大阪府教育委員会

加治・神前・畠中遺跡

—大阪府立貝塚高等学校本館棟改築に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



掘立柱建物跡 3、4、井戸66(南東から)



掘立柱建物跡 5(北から)

原色図版2 井戸66出土「新」墨書土器



序 文

貝塚市は大阪府南部の泉州地域に所在します。市域は北西から南東にかけて細長く北西部は大阪湾に面し、南東に向かって順次平野部、丘陵部、和泉山地と続き、その間を大阪湾に注ぐ河川がはしる起伏に富んだ地形を有しています。

加治・神前・畠中遺跡は、貝塚市北西部の海浜部から平野部にかけて広がる遺跡で、旧地名である加治村、神前村、畠中村にその名前を由来します。これまでに、大阪府教育委員会、財団法人大阪府埋蔵文化財協会、財団法人大阪府文化財調査研究センター（両団体とも現公益財団法人大阪府文化財センター）、貝塚市教育委員会が発掘調査を実施しています。

その結果、縄文時代から中世までの複合遺跡であることが明らかになっています。大阪府教育委員会では、府立貝塚高校本館棟改築に際して、その位置が同遺跡に隣接することから、試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が発見されたため、遺跡の拡大を行うとともに発掘調査を実施しました。調査の結果、奈良時代の建物跡や、井戸などが発見されました。特に井戸の中からは「新」と墨書された須恵器が発見されたことは注目に値します。この成果は、現地説明会の開催や、大阪府ホームページに掲載し、広く一般の皆様にも公開しています。

発掘調査の実施にあたっては、地元の皆様をはじめ、大阪府教育委員会事務局施設財務課、貝塚市教育委員会社会教育課等関係機関のご協力をいただき深く感謝いたします。最後に、今後とも文化財保護行政に一層のご協力とご理解を賜りますようお願いいたします。

平成 28 年 3 月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 星住哲二

例 言

1. 本書は、大阪府立貝塚高等学校本館棟改築に伴う加治・神前・畠中遺跡（貝塚市畠中一丁目所在）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会事務局文化財保護課が同施設財務課の依頼を受けて実施した。
3. 発掘調査は、文化財保護課調査第二グループ主査 竹原伸次が担当し、平成 25 年 11 月 1 日から平成 26 年 3 月 14 日まで実施した。調査番号は 13039 である。
遺物整理は、文化財調査事務所において、調査管理グループ主査 小浜 成、同主査 三木 弘、同副主査 藤田道子と竹原が担当し、平成 27 年度に実施した。
4. 調査における写真測量は、和歌山航測株式会社大阪支店に委託して実施した。撮影フィルムは同社が保管している。
5. 本書に掲載した遺物の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
6. 本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会が保管している。
7. 本書の執筆・編集は竹原が担当した。
8. 発掘調査、遺物整理及び本書の作成に要した経費は、事業者である大阪府教育委員会が負担した。
9. 本書は 300 部作成し、一部あたりの印刷単価は 871 円である。

凡 例

1. 基準高は、T.P.（東京湾平均海水位）を基準とし、プラス値を使用している。
2. 座標系は、世界測地系により、第VI系に準拠している。単位はメートルである。
3. 方位は、座標北である。調査地では、座標北は磁北より東へ $7^{\circ} 0'$ 、真北より東へ $0^{\circ} 22'$ 振れる。
4. 土層断面図の土色及び遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2001 年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。

本文目次

序文

例言

第1章 調査の経過と周辺の環境	1
第1節 調査の経過	1
第2節 周辺の環境	2
第2章 調査の成果	4
第1節 調査の方法	4
第2節 調査の成果	4
第3章 まとめ	29

挿図目次

第1図 調査地位位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図 (貝塚市域のみ)	3
第3図 地区割図	4
第4図 遺構平面図	5・6
第5図 断面模式図	7
第6図 掘立柱建物跡1平面・断面図	8
第7図 掘立柱建物跡2平面・断面図	9
第8図 掘立柱建物跡3平面・断面図	10
第9図 掘立柱建物跡4平面・断面図	11・12
第10図 掘立柱建物跡5平面・断面図	13・14
第11図 溝39 遺物出土状況・断面図	16
第12図 溝65 断面図	17
第13図 溝73 断面図	17
第14図 溝64 断面図	17
第15図 土坑2 断面図	18
第16図 土坑33 断面図	18
第17図 土坑70 断面図	19
第18図 土坑87 断面図	19
第19図 ビット51 断面図	20
第20図 ビット93 断面図	20
第21図 ビット124 断面図	20
第22図 井戸66 平面・断面図	22

第 23 図	遺構内出土遺物	24
第 24 図	井戸 66 出土遺物	25
第 25 図	落込み出土遺物	26
第 26 図	包含層出土遺物	27
第 27 図	周辺発掘調査位置図	29

表 目 次

第 1 表	遺物観察表	28
-------	-------	----

図 版 目 次

図版 1	遺構 1	北東部全景（南西から） 南西部全景（北東から）
図版 2	遺構 2	掘立柱建物跡 1（北西から） 掘立柱建物跡 2（南東から）
図版 3	遺構 3	掘立柱建物跡 3・4、井戸 66（北西から） 掘立柱建物跡 5（南東から）
図版 4	遺構 4	柱穴 115 柱検出状況（南東から） 溝 39 遺物出土状況（南から）
図版 5	遺物 1	遺構内出土遺物
図版 6	遺物 2	井戸 66 出土遺物
図版 7	遺物 3	落込み出土遺物
図版 8	遺物 4	落込み出土遺物（上） 包含層出土遺物（下）

第1章 調査の経過と周辺の環境

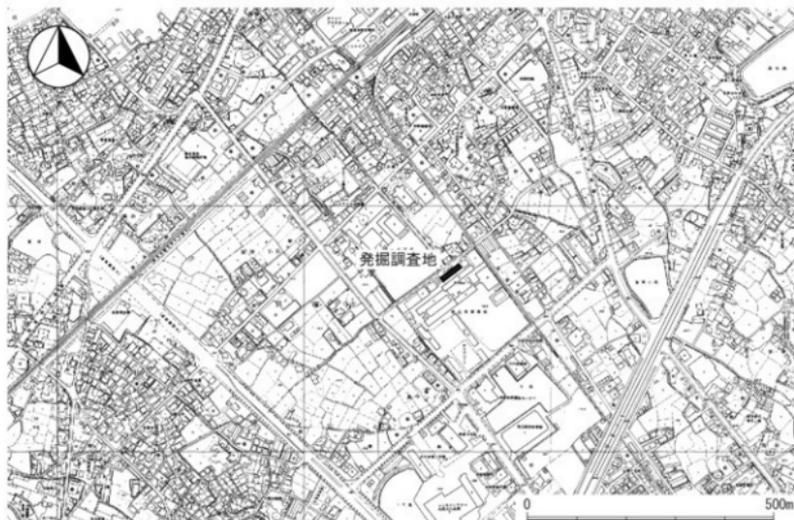
第1節 調査の経過

大阪府教育委員会では、府立高等学校の耐震化工事を進めており、貝塚高等学校においても校舎の耐震化工事を実施している。しかしながら、本館棟については調査の結果、耐震化工事では強度が維持できないとのことで、本館棟については建て替えることとなった。

一方、貝塚高等学校の敷地は、一部周知の埋蔵文化財包蔵地である「加治・神前・畠中遺跡」に含まれていた。大阪府教育委員会事務局文化財保護課（以下、文化財保護課）は、本館棟建て替え用地は加治・神前・畠中遺跡の範囲外であるが、遺跡と隣接しているため事業主体である大阪府教育委員会事務局施設財務課（以下、施設財務課）と協議を行った。この結果、本館棟建て替え用地内を試掘調査することとなった。

試掘調査は、建て替え用地内に2カ所のトレンチを設定し平成24年12月25日に実施した。この結果、2カ所のトレンチともに遺物包含層が発見され、遺構も確認された。この結果を受けて文化財保護課は、施設財務課に文化財保護法第97条第1項に基づく遺跡発見通知を提出し、遺跡の範囲を拡大するとともにその取扱いについて再度協議を行った。この結果、平成25年度に本館棟建て替え用地内の全面発掘調査を実施することとなった（第1、2図）。

発掘調査は、平成25年11月1日から平成26年3月14日まで実施し、調査面積は728㎡である。



第1図 調査地位置図

第2節 周辺の環境

貝塚市は大阪府南部の泉州と呼ばれる地域のほぼ中央部に位置している。市域はほぼ北西から南東に細長く、北西は大阪湾に面し、南東は大阪府と和歌山県との境をなす和泉山脈となっている。

地域の地形は、南から北へ大きく山地山地より派生する丘陵部、平野部、海浜部に分類することができる。また、和泉山脈を源を発する津田川、近木川、見出川によって形成された高位・中位・低位の河岸段丘が発達している。

加治・神前・畠中遺跡は、貝塚市の海浜部から平野部に当たる貝塚市畠中・加神に所在し、近木川右岸の段丘面上に立地する。南北約1,400 m、東西約1,100 mに及ぶ広大な範囲を有している。縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。

加治・神前・畠中遺跡では、これまで都市計画道路貝塚中央線建設に伴い、大阪府教育委員会、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が発掘調査を実施しており、古墳時代後期の竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物跡などを検出している。また、都市計画道路貝塚中央線・南海単独立体交差事業に伴い財団法人大阪府文化財調査研究センター、貝塚市教育委員会が発掘調査を実施しており、古墳時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡などを検出している。

貝塚市教育委員会では、この他に今回の調査地の南約400 mにある市役所周辺を中心として十数カ所の発掘調査を実施しており、弥生時代の井戸、飛鳥から奈良時代、平安時代の掘立柱建物跡、溝、井戸等、中世の耕作跡を検出している。この他に、遺構は検出していないが、縄文時代の土器や石器がこの遺跡から出土している。

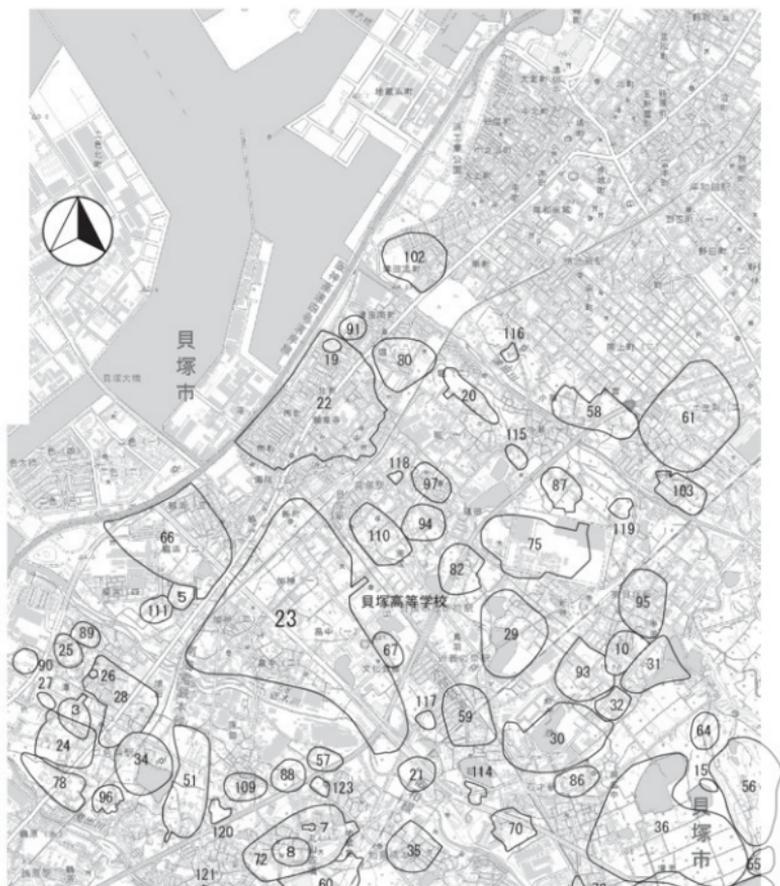
加治・神前・畠中遺跡以外の貝塚市内の遺跡を概観すると、後期旧石器時代では、沢城跡、王子遺跡、地藏堂遺跡でナイフ形石器が出土している。縄文時代の明確な遺構は検出されていないが、本遺跡の北西に隣接する脇浜遺跡で検出した自然流路から縄文時代晩期の土器が出土している。また、加治・神前・畠中遺跡、王子遺跡、新井・鳥羽北遺跡、海塚遺跡、沢西遺跡、石才南遺跡などで縄文時代の遺物が出土している。

弥生時代では、加治・神前・畠中遺跡で前期の井戸を、沢遺跡、沢西遺跡で前期の溝を検出している。石才南遺跡では、中期の竪穴住居跡を検出している。

古墳時代になると、加治・神前・畠中遺跡と近木川を挟んだ対岸に前期の前方後円墳である地藏堂丸山古墳が築かれる。また、後世に破壊されたが中期に築かれた古墳も確認されている。集落としては、石才南遺跡で竪穴住居や掘立柱建物跡を検出している。

古代では、地藏堂廃寺、秦廃寺などの寺院跡や沢城跡、窪田遺跡などで遺構・遺物が発見されている。中世では、窪田遺跡・窪田廃寺、王子遺跡、瀬池遺跡、津田北遺跡、橋本遺跡などで遺構・遺物が発見されている。

近世になると、願泉寺を中心とする貝塚市内町が形成される。願泉寺は浄土真宗の寺院として栄えていたが、1577年に織田信長により焼き討ちにあっている。発掘調査により掘や土塁が発見されている(第2図)。



3. 沢遺跡 5. 長楽寺跡 7. 地藏堂丸山古墳 8. 地藏堂廃寺 9. 下新出遺跡 10. 楽庵寺 15. 麻生中新池遺跡 16. 河池遺跡 20. 堀遺跡 19. 泉州麻生坂壺出土地 21. 橋本遺跡 22. 貝塚市内町遺跡 23. 加治・神前・畠中遺跡 24. 明楽寺跡 25. 沢共同墓地遺跡 26. 沢西出遺跡 27. 沢海岸北遺跡 28. 沢城跡 29. 新井・鳥羽遺跡 30. 新井ノ池遺跡 31. 半田遺跡 32. 麻生中遺跡 34. 鶴池遺跡 35. 積善寺城跡 36. 清見遺跡 38. 高井天神廃寺・高井城跡 43. ニッ池遺跡 51. 窪田遺跡・窪田廃寺 55. 檜ヶ谷城跡 56. 半田遺跡(清見地区) 57. 堤遺跡 58. 小瀬五所山遺跡 59. 石才遺跡 60. 王子遺跡 61. 土生遺跡 64. 海岸寺山遺跡 66. 脇浜遺跡 67. 今池遺跡 70. 石才南遺跡 71. 名越遺跡 72. 地藏堂遺跡 73. 名越西遺跡 75. 新井・鳥羽北遺跡 78. 沢西遺跡 79. 王子西遺跡 80. 津田遺跡 82. 堀田遺跡 86. 麻生中出口遺跡 87. 小瀬遺跡 88. 堤三宅遺跡 89. 沢新聞遺跡 90. 沢タナジリ遺跡 91. 堀新遺跡 93. 麻生中下代遺跡 94. 堀秋毛遺跡 95. 半田北遺跡 96. 沢老ノ塚遺跡 97. 東遺跡 102. 津田北遺跡 103. 久保遺跡 109. 窪田ハマゲ遺跡 110. 海塚遺跡 111. 脇浜川端遺跡 113. 橋本野岸ノ下遺跡 114. 麻生中薬師堂遺跡 115. 谷池遺跡 116. 小瀬大道端遺跡 117. 石村通井口遺跡 118. 海塚宝伝遺跡 119. 小瀬与九郎遺跡 120. 王子大イケダイ遺跡 121. 王子ヨウサ遺跡 123. 堤西浦遺跡 125. 橋本原宮遺跡

第2図 周辺遺跡分布図(貝塚域のみ)

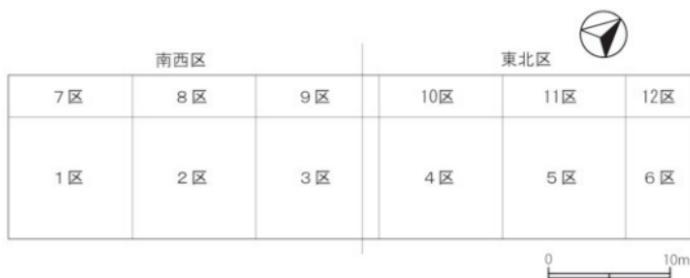
第2章 調査の成果

第1節 調査の方法

発掘調査地は、北西側は市道、北東側は旧音楽室、南東側は本館棟、南西側は同窓会館に隣接しており、掘削土を仮置きするスペースがほとんどなかった（第1図）。このため、調査区を二分割して調査する方法が考えられた。しかしながら、この調査方法では、本館棟建設の計画に間に合わないため、施設財務課との協議により、掘削土はすべて場外に搬出し、埋め戻しは行わないこととなった。

掘削土はすべて場外に搬出することで調査を開始したが、掘削土を一時的に仮置きする必要があったため、調査区を東北区、南東区に二分割し、まず東北区から発掘調査を開始した。このため、写真測量も2回に分けて行った。東北区発掘調査終了後、南東区の調査を開始したが、掘削土の仮置き場所が狭く頻繁に残土の搬出を行わざるを得なかった。

調査区は方位とはほぼ45度傾いているため、遺物の取り上げには独自の地区割りを設定した（第3図）。調査区の南西端を基準として10mの地区割りをを行い、1区から12区のグリッドを設定した。遺構の測量には平面直角座標を使用した。



第3図 地区割図

第2節 調査の成果

調査区は、調査以前は高等学校の正面入口となっており、入口までの通路や築山が築かれていた。しかしながら、この地には昭和31年に火事で一部を消失した旧本館が存在していたことがわかってきた。旧本館の基礎については、解体時に撤去されていたが明確ではなかったが、調査の事前に行われた築山等の撤去工事の際に基礎がフーチング、立ち上がりともほとんど残っていることが明らかとなった。

このため、調査に支障となる立ち上がりについては機械掘削の際の撤去したが、フーチングについては、遺構面を深く掘り込んで設置されていた。基礎以外については、遺構面は良好に残存していたため、フーチングまで撤去すると反対に残存している遺構面まで破壊される可能性があったので、フーチングは残して調査することとなった。

1. 基本層序

加治・神前・畠中遺跡における層序は、全調査区において基本的に同一である（第4図）。

第1層は、高校建設時の盛土であり、約0.5mほど盛土されている。第2層は褐灰色（10YR4/1）砂質シルトで、近現代の耕作土である。層厚は約0.15mである。第3層は褐色（7.5YR4/6）砂質シルトで床土である。層厚は約0.05mである。この層まで機械により掘削した。

第4層は、灰黄褐色（10YR5/2）砂質シルトで旧の耕作土である。層厚は約0.06mである。第5層は、黄褐色（2.5Y5/3）砂質シルトである。層厚は0.15mである。第6層は、黄灰色（2.5Y4/1）砂質シルトである。層厚は約0.1mである。第7層は、オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルトである。層厚は約0.06mである。第8層は褐灰色（10YR4/1）砂質シルトである。調査区の北東端から検出した落込みの埋土である。第9層は、黄褐色（10YR5/8）粘質シルト（礫含む）で地山である。

出土した遺物は当初、第4、5層を取上1層、第6、7層を取上2層、第8層を取上3層として取上げていたが、調査の進捗によりこの層を遺構（落込み）とした。取上1、2層までは、中世までの遺物を含むが、取上3層からは奈良時代の遺物しか出土しない。

第今回の調査では、遺構はすべて地山上面から検出した。

2. 遺構

(1) 掘立柱建物跡

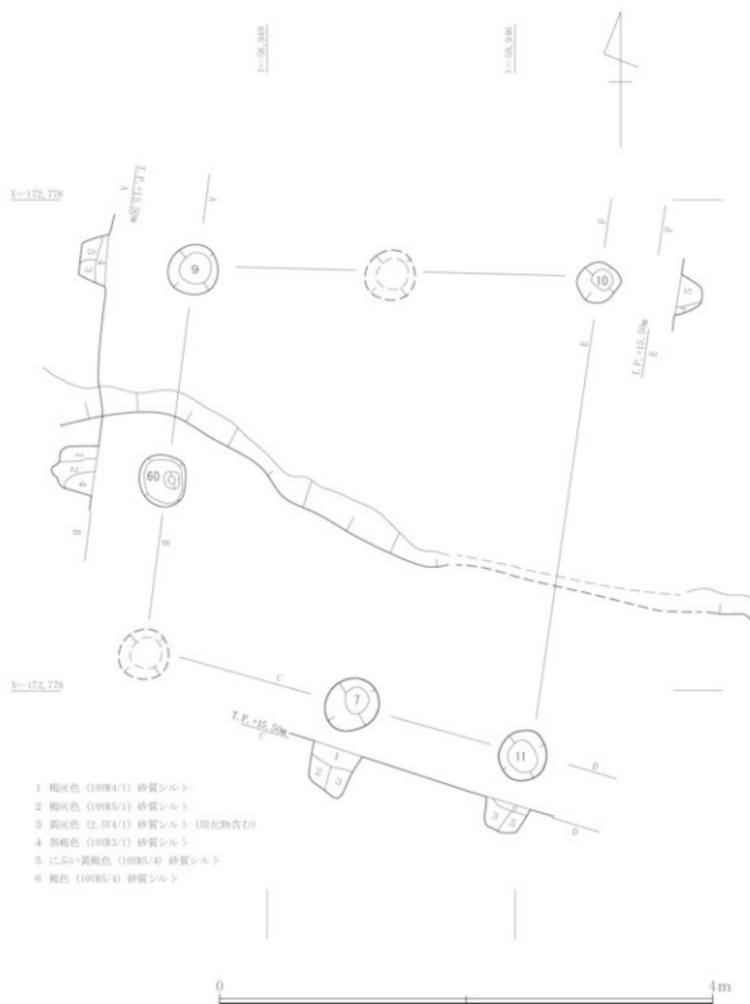
掘立柱建物跡1（第4・6図、図版1上・2上）は、5・6区から検出した。柱穴7・9・10・11・60からなる2間×2間の建物である。攪乱等により3本の柱は確認できなかった。主軸方向はN-5°-Eで、ほぼ南北方向を基準としている。南北方向の長さは、東側で約4m、西側で約3.6mを測る。東西方向の長さは、北側で約3.2m、南側で約3mを測りいびつな四角形を呈する。柱間を確認できるのは南北、東西方向とも一カ所だけで南北方向約1.6m、東西方向約1.4mである。柱穴の規模は、約0.3から0.4mの円形で、深さ0.2から0.4mを測る。柱跡は確認できなかった。

各柱穴から須恵器、土師器が出土したが、図化でなかった。

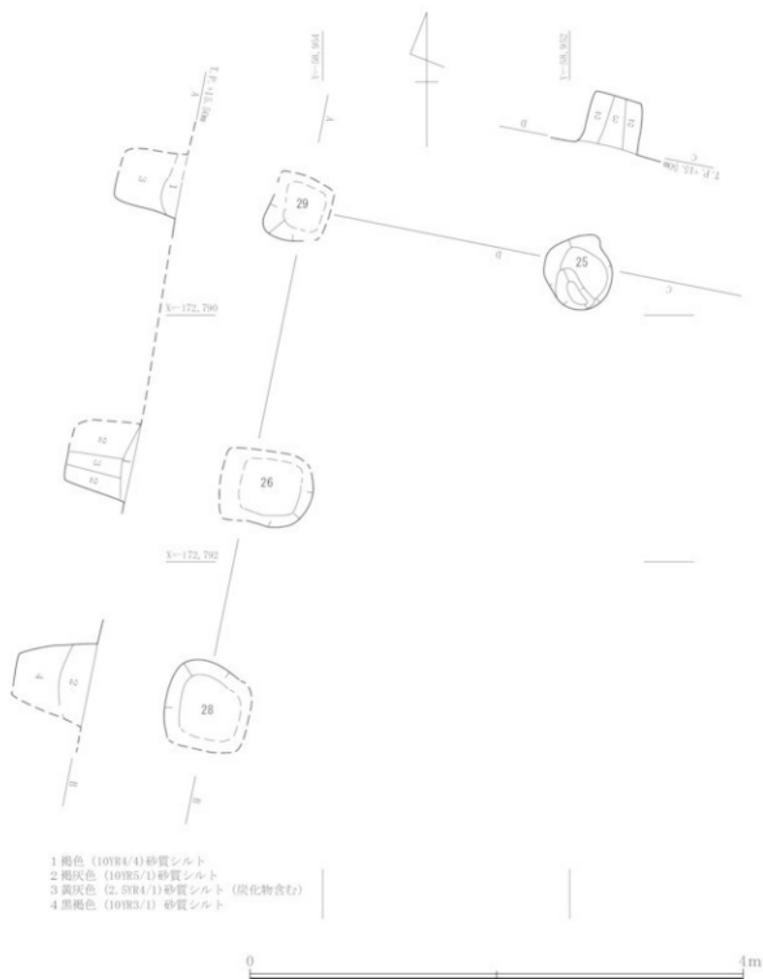
掘立柱建物跡2（第4・7図、図版1上・2下）は、4・5区から検出した。柱穴25・26・28・29からなる。建物は調査区外に広がっており、東西方向1間以上、南北方向2間以上の建物である。主軸方向はN-13°-Eで、ほぼ南北方向を基準としている。確認できる南北方向の長さは、東側で約4.2mを測る。確認できる東西方向の長さは、北側で約3.5mを測る。柱間は、南北東西方向とも約2mである。全体を確認できる柱穴はなかったが、規模は一辺約0.6から0.7mの方形で、深さ0.5から0.6



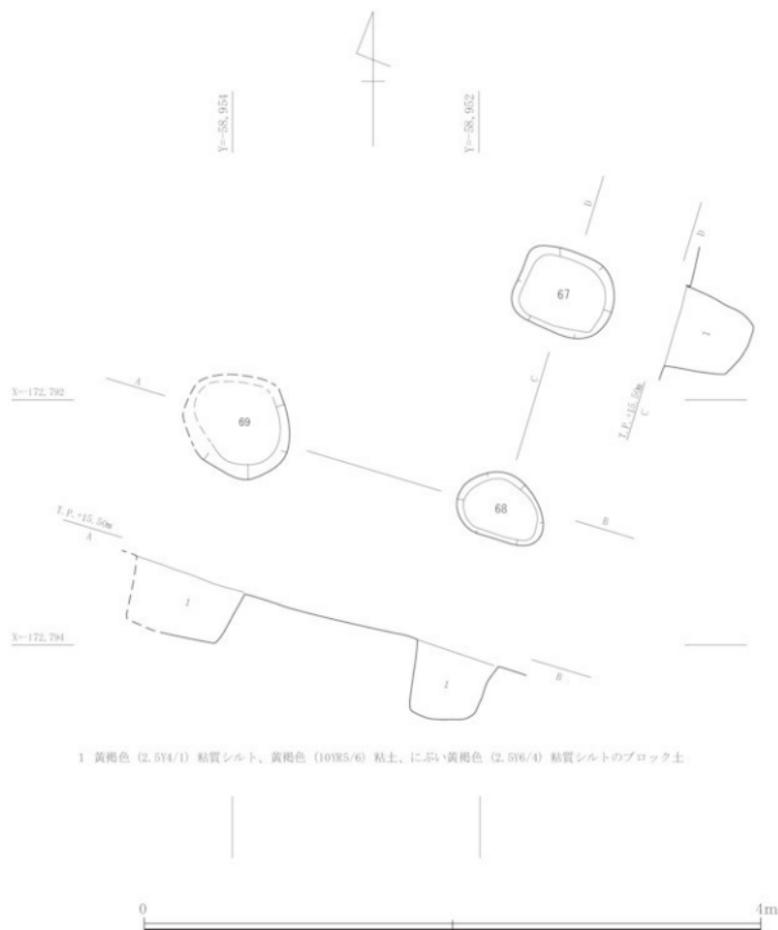
第5図 断面模式図



第6図 掘立柱建物跡1平面・断面図



第7図 掘立柱建物跡2平面・断面図



1 黄褐色 (2.5Y4/1) 粘質シルト、黄褐色 (10YR5/6) 粘土、にぶい黄褐色 (2.5Y6/4) 粘質シルトのブロック土

第8図 掘立柱建物跡3平面・断面図

mを測る。柱跡は25、26で確認できた。柱の直径は約0.2mを測る。

各柱穴から須恵器、土師器が出土したが、図化できなかった。

掘立柱建物跡3（第4・8図、図版1下・3上）は、9区から検出した。柱穴67・68・69からなる。建物は建物2と同様に調査区外に広がっており、東西方向1間以上、南北方向1間以上の建物である。掘主軸方向はN-18°-Eで、ほぼ南北方向を基準としている。確認できる南北方向の長さは、西側で約3mを測る。確認できる東西方向の長さは、南側で約2.4mを測る。柱間は、南北東西方向とも約2mである。全体を確認できた柱穴67,68の規模は、67が一边約0.7mの方形、68が長径約0.6m、短径約0.4mのいびつな楕円形を呈し、深さ約0.5mを測る。柱跡は確認できなかった。

各柱穴から須恵器、土師器が出土したが、図化できなかった。

掘立柱建物跡4（第5・9図、図版1下・3上）は、4・5区から検出した。柱穴84・89・94・96・101・103からなる。掘乱等で検出できなかった柱もあるが、建物の全体が把握できたのはこの建物のみである。梁行2間、桁行3間の建物である。主軸方向はN-78°-Wで、ほぼ東西方向を基準としている。梁行の長さは約4m、桁行の長さは約7.5mを測る。柱間は、桁行約2m、梁行約2.5mである。全体を確認できた柱穴84・89・94・96・101の規模は、一边約0.7mから0.9mの方形で、深さ約0.4から0.5mを測る。柱跡は84・94・96・103・104で確認できた。柱の直径は約0.2mである。

各柱穴から須恵器、土師器が出土したが、図化できなかった。

掘立柱建物跡5（第5・10図、図版1下・3下・4上）は、1・7区から検出した。柱穴114・115・116・117・118・119・122・123からなる。梁行2間、桁行4間以上の建物である。主軸方向はN-12°-Eで、ほぼ南北方向を基準としている。梁行の長さは約4m、桁行の長さは約9m以上を測る。柱間は、桁行約2m、梁行約2から2.5mである。全体を確認できた柱穴115・117・118の規模は、一边約0.7mから1mの方形で、深さ約0.5から0.6mを測る。柱跡は114・115・117・118・122で確認できた。柱の直径は約0.2mである。また、柱穴115には柱が残存していた。

各柱穴から須恵器、土師器が出土したが、図化できなかった。

この建物東側に庇が確認できた。柱穴107・108・109・110である。東面以外に庇があったかどうかは、すべて調査区外のため不明である。主柱からの距離は約2.5m、柱間は約2から2.5mを測る。

柱穴の規模は、一边約0.4mの方形で、深さ約0.3mを測る。柱跡は108で確認できた。柱の直径は約0.15mである。

また、107・108・109の東側に隣接して柱穴111・112・113を検出した。これらの柱穴もその位置から掘立柱建物跡5の庇柱と考えるのであれば、建替が考えられるが、主柱の検出時の観察や、断面観察からは、建替は確認できなかった。

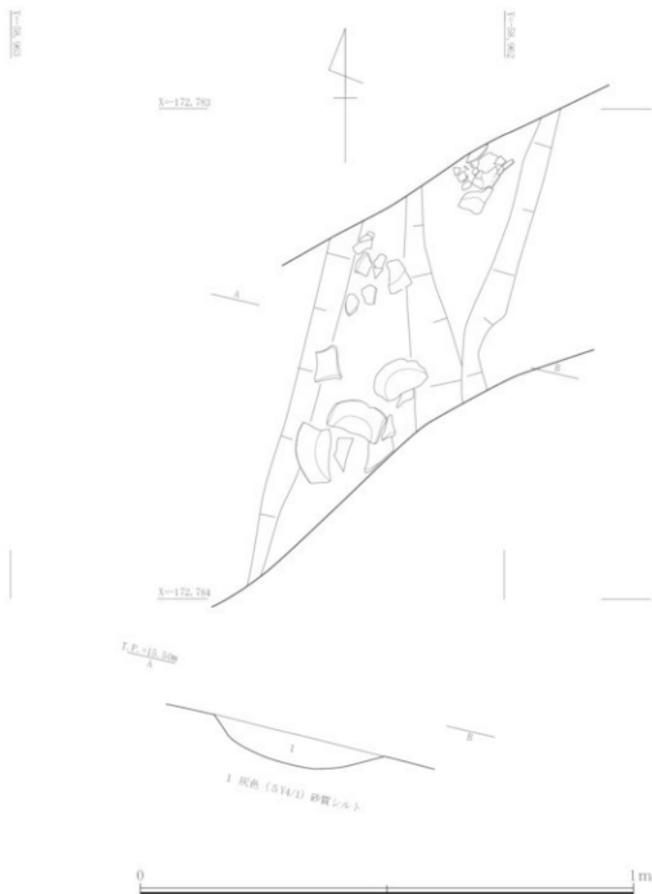
各柱穴から須恵器、土師器が出土したが、図化できるものはなかった。

今回の調査では、この他にも柱穴と考えられる遺構を検出しているが、建物等は復元できなかった。

(2) 溝

溝 39 (第 11 図、図版 4 下) は、10 区で検出した。一方は調査区外、一方は擾乱により破壊されており、約 0.6 m ほどしか残存していなかった。幅約 0.4 m、深さは約 0.15 m を測る。埋土は灰色 (5Y4/1) 砂質シルトである。方向は $N-12^{\circ}-E$ で、ほぼ南北方向の溝である。

この溝からは、奈良時代のほぼ完形の須恵器杯身や土師器甕片が出土したがそのうち二点を図化した (第 23 図 1・2、図版 5)。



第 11 図 溝 39 遺物出土状況・断面図

溝 65 (第4・12図) は、2、3、9区から検出した。方向はN-10°-20°-Eで、ほぼ南北方向の溝である。北側、南側とも調査区外に伸びており、検出長約17mを測る。幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。埋土は褐灰色(7.5YR4/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。



第12図 溝 65 断面図

溝 73 (第4・13図) は、2、3、8区から検出した。方向はN-85°-Wで、ほぼ東西方向の溝である。西側は調査区外に伸びており、検出長約10mを測る。幅約0.35m、深さ約0.2mを測る。埋土は褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したがそのうち一点を図化した(第23図3 図版5)。



第13図 溝 73 断面図

溝 64 (第4・14図) は、9区から検出した。溝 65 を切っている。方向はN-75°-Wで、ほぼ東西方向の溝である。北側は、基礎の攪乱で全体を明らかにすることはできなかった。残存長約1.5mを測る。



第14図 溝 64 断面図

幅約0.3m、深さ約0.2mを測る。埋土は褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 4 (第4図) は、11区から検出した。方向は溝 73 と同じで、ほぼ東西方向の溝である。西側は調査区外に伸びており、全体は明らかにすることはできなかった。検出長約1.5mを測る。幅約0.3m、深さ約0.2mである。埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 59 (第4図) は、11区から検出した。方向は溝 65 と同じで、ほぼ南北方向の溝である。南側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかった。残存長約1.7mを測る。幅約0.2m、深さ約0.2mである。埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器杯身や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 37 (第4図) は、10区から11区で検出した。方向は溝 73 と同じで、ほぼ東西方向の溝である。西側は調査区外に伸びており、全体は明らかにすることはできなかった。検出長約3.5mを測る。幅約0.3m、深さ約0.2mである。埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 40 (第4図) は、10区から検出した。方向は溝 65 と同じで、ほぼ南北方向の溝である。南側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかった。検出長約0.6mを測る。幅約0.3m、深さ約0.2mである。埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 55 (第4図) は、10区から検出した。方向は溝 65 と同じで、ほぼ南北方向の溝である。北側は調査区外に伸びており、南側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかった。検出長約1.0mを測る。幅約0.2m、深さ約0.2mである。埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 36 (第4図) は、4区から検出した。方向は溝 73 と同じで、ほぼ東西方向の溝である。西側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかった。検出長約4.5mを測る。幅約0.3m、深さ約0.2mである。埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 30 (第4図) は、10区から検出した。方向は溝 65と同じで、ほぼ南北方向の溝である。北側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかった。検出長約 1.0 m を測る。幅約 0.2 m、深さ約 0.2 m である。埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 46 (第4図) は、4区から検出した。方向は溝 73と同じで、ほぼ東西方向の溝である。全長約 2.5 m を測る。幅約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 41 (第4図) は、3区から4区で検出した。方向は溝 65と同じで、ほぼ南北方向の溝である。中央部を攪乱で切られているが全体を明らかにすることができた。全長約 5.5 m を測る。幅約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 58 (第4図) は、9区から検出した。方向は溝 65と同じで、ほぼ南北方向の溝である。北側は調査区外に伸びており、全体は明らかにすることはできなかった。検出長約 1.0 m を測る。幅約 0.2 m、深さ約 0.2 m である。埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

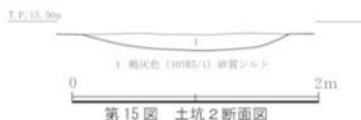
溝 61 (第4図) は、3区から検出した。方向は溝 65と同じで、ほぼ南北方向の溝である。北側は攪乱で全体を明らかにすることができなかった。検出長約 1.0 m を測る。幅約 0.2 m、深さ約 0.2 m である。埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

溝 80 (第4図) は、3区から検出した。方向は溝 65と同じで、ほぼ南北方向の溝である。中央部を攪乱で切られているが全体を明らかにできた。全長約 5.5 m を測る。幅約 0.2 m、深さ約 0.2 m である。埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

(3) 土坑

土坑 1 (第4図) は、12区から検出した。北西側は調査区外であり全体を明らかにすることはできなかった。長径約 2.5 m 以上、短径約 0.5 m 以上の楕円形を呈するものと思われる。深さは約 0.2 m、埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 2 (第4・15図) は、12区から検出した。西側は後述する落込みにさらされており、全体を明らかにすることはできなかった。一辺約 1.5 m の隅丸方形を呈するものと思われる。深さは約 0.2 m、埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したがそのうち二点を図化した (第23図4・5 図版5)。



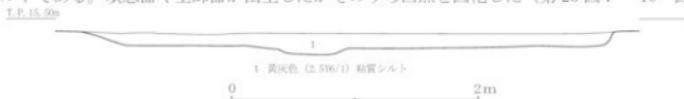
第15図 土坑2断面図

土坑 33 (第4・16図) は、4区から検出した。攪乱により全体を明らかにすることはできなかった。深さは約 0.2 m、埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。須恵器や土師器が出土したがそのうち一点を図化した (第23図6)。また、混入ではあるが、サヌカイトの横長剥片が一点出土した (第26図57)。



第16図 土坑33断面図

土坑 70 (第4・17図) は、8区から検出した。調査区外、東側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかった。一辺約4.5mの隅丸方形を呈するものと思われる。深さは約0.2m、埋土は、黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したがそのうち四点を図化した(第23図7～10 図版5)。



第17図 土坑 70 断面図

土坑 87 (第4・18図) は、3区の溝65と73の交差部から検出した。長径約0.8m、短径約0.3mの楕円形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、灰色(5Y5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したがそのうち一点を図化した(第23図11 図版5)。



第18図 土坑 87 断面図

土坑 13 (第4図) は、5区から検出した。一辺約1.5mの隅丸方形を呈する。深さは約0.1m、埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 16 (第4図) は、5区から検出した。西側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかった。長径2.0m以上、短径約1.2mの楕円形を呈するものと思われる。深さは約0.1m、埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 17 (第4図) は、5区から検出した。一辺約1.2mの隅丸方形を呈する。深さは約0.1m、埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 22 (第4図) は、5区から検出した。南西側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかったが、一辺約3.0mの隅丸方形を呈するものと思われる。深さは約0.2m、埋土は、黒褐色(10YR3/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 24 (第4図) は、5区から検出した。北西側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかったが、一辺約1.2mの隅丸方形を呈するものと思われる。深さは約0.2m、埋土は、2層に別れ、上層が褐色(10YR4/4)粘質シルト、下層が黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 52 (第4図) は、10区から検出した。北側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかった。深さは約0.2m、埋土は、褐色(10YR4/4)粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

土坑 56 (第4図) は、10区から検出した。南東側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかったが、一辺約1.2mの隅丸方形を呈するものと思われる。深さは約0.2m、埋土は、褐色(10YR4/4)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 62 (第4図) は、3区から検出した。北側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかったが、長径0.7m、短径約0.4mの楕円形を呈するものと思われる。深さは約0.2m、埋土は、褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 76 (第4図) は、3区から検出した。北側は井戸66に切られており、全体を明らかにすることはできなかったが、長径2.0m以上、短径約1.2mの楕円形を呈するものと思われる。深さは約0.2m、埋土は、にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 78 (第4図) は、3区から検出した。一辺約 1.5 m の隅丸方形を呈する。深さは約 0.1 m、埋土は、黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 82 (第4図) は、3区から検出した。長径 1.0 m、短径約 0.6 m の楕円形を呈する。深さは約 0.1 m、埋土は、黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

土坑 99 (第4図) は、3区から検出した。北西側は攪乱で全体を明らかにすることはできなかったが、長径 1.0 m 以上、短径約 0.6 m の楕円形を呈するものと思われる。埋土は、2層に別れ、上層が褐色 (10YR4/4) 粘質シルト、下層が褐灰色 (10YR6/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

(4) 柱穴・ピット

今回の調査では、掘立柱建物を構成する柱穴以外にも多くの柱穴やピットを検出しているが、これらの遺構からは掘立柱建物を復元することはできなかった。

この報告では主要なピットのみ報告する。

ピット 51 (第4・20図) は、4区から検出した。直径約 0.3 m の丸形を呈する。

深さは約 0.2 m、埋土は、1層褐灰色 (10YR5/1) 砂質シルト、2層黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルトである。須恵器や土師器が出土したがそのうち一点を図化した (第23図 12 図版5)。

ピット 93 (第4・21図) は、2区から検出した。直径約 0.5 m の丸形を呈する。深さは約 0.3 m、埋土は、黄灰色 (2.5YR4/1) 粘質シルトと、黄褐色 (10YR5/6) 粘土のブロック土である。須恵器や土師器が出土したがそのうち一点を図化した (第23図 13 図版5)。

ピット 124 (第4図) は、2区から検出した。一辺約 0.5 m の隅丸方形を呈する。深さは約 0.3 m、埋土は、褐灰色 (10YR4/1) 粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したがそのうち二点を図化した (第23図 14・15 図版5)。

ピット 3 (第4図) は、11区から検出した。直径約 0.3 m の丸形を呈する。土坑 2 を切っている。深さは約 0.2 m、埋土は、1層褐灰色 (10YR5/1) 砂質シルト、2層黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ピット 5 (第4図) は、11区から検出した。直径約 0.3 m の丸形を呈する。深さは約 0.3 m、埋土は、黄灰色 (2.5YR4/1) 粘質シルトと、黄褐色 (10YR5/6) 粘土のブロック土である。遺物は出土しなかった。

ピット 8 (第4図) は、11区から検出した。直径約 0.3 m の丸形を呈する。深さは約 0.4 m、埋土は1層褐灰色 (10YR5/1) 砂質シルト、2層黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト、3層灰色 (5Y4/1) 砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

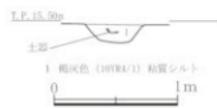
ピット 18～21 (第4図) は、5区から検出した。土坑 17、18、22 の間から検出した。いずれも一辺約 0.3 m の丸形を呈し、深さは約 0.1 m の浅いピットである。埋土は、褐灰色 (10YR5/1) 砂質シルトである。遺物は出土しなかった。



第19図 ピット 51 断面図



第20図 ピット 93 断面図



第21図 ピット 124 断面図

ピット15(第4図)は、5区から検出した。直径約0.2mの丸形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ピット23(第4図)は、5区から検出した。一辺約0.8mの隅丸方形を呈する。深さは約0.3m、1層褐灰色(10YR5/1)砂質シルト、2層黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ピット31(第4図)は、4区から検出した。直径約0.2mの丸形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、褐色(10YR4/4)砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ピット38(第4図)は、10区から検出した。直径約0.3mの丸形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、1層褐灰色(10YR5/1)砂質シルト、2層黄褐色(10YR5/6)砂質シルト、3層褐色(10YR4/4)砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ピット53(第4図)は、10区から検出した。土坑52、ピット54を切っている。直径約0.5mの丸形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、褐色(10YR4/4)砂質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

ピット54(第4図)は、10区から検出した。直径約0.3mの丸形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、1層褐色(10YR4/4)砂質シルト、2層黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ピット57(第4図)は、9区から検出した。直径約0.3mの丸形を呈する。深さは約0.3m、埋土は、1層褐灰色(10YR5/1)砂質シルト、2層黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ピット90(第4図)は、2区から検出した。短径約0.5m、長径0.7mの楕円形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、褐色(10YR4/4)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

ピット74(第4図)は、2区から検出した。溝73を切っている。一辺約0.4mの方形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、1層黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトと黄褐色(10YR5/6)粘質シルト、にぶい黄褐色(2.5Y6/4)粘質シルトのブロック土、2層褐灰色(10YR5/1)粘質シルト、3層灰黄色(2.5Y6/2)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

ピット88(第4図)は、3区から検出した。直径約0.3mの円形を呈する。深さは約0.1m、埋土は、褐色(10YR4/4)粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

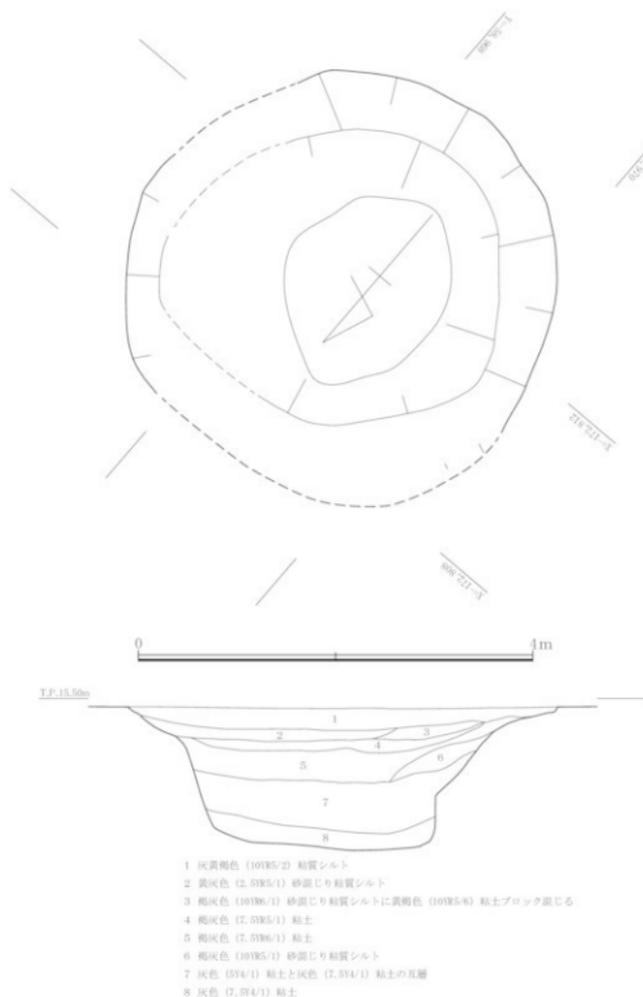
ピット90(第4図)は、2区から検出した。短径約0.5m、長径0.7mの楕円形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、褐色(10YR4/4)粘質シルトである。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。

ピット85、91、93、95(第4図)は、2区から検出した。ピット85は直径約0.5mの円形、ピット91、93、95は一辺約0.4mの隅丸方形を呈する。深さは約0.2m、埋土は、ピット85が1層褐色(10YR4/4)粘質シルト、2層褐灰色(10YR6/1)粘質シルト、ピット91が1層黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトと黄褐色(10YR5/6)粘質シルト、にぶい黄褐色(2.5Y6/4)粘質シルトのブロック土、2層暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト、ピット93、95が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトと黄褐色(10YR5/6)粘質シルト、にぶい黄褐色(2.5Y6/4)粘質シルトのブロック土である。

これらのピットは、ピット85と91間は検出できなかったが、前述したピット124を含めると約1.3mの間隔で並んでおり、掘立柱建物に復元できる可能性がある。須恵器や土師器が出土したがピット124以外は図化できなかった。

ピット111～113(第4図)は、1区から検出した。一辺約0.3mの隅丸方形を呈する。深さは約0.2m、

埋土は、ピット111,113が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトと黄褐色(10YR5/6)粘質シルトのブロック土、ピット112が褐色(10YR4/1)粘質シルトである。これらのピットは掘立柱建物跡5の底を構成するピット108～109の東側に隣接して検出されたので、これらの柱穴もその位置から掘立柱建物跡5の建替前の庇柱の可能性が考えられる。須恵器や土師器が出土したが図化できなかった。



第22図 井戸66平面・断面図

(5) 井戸

井戸66(第22図)は、10区から検出した。攪乱により一部明らかにできなかった部分もあるがほぼその全容を明らかにすることができた。

直径は約4.5mの円形を呈し、検出面より約0.5mから0.9mまでは、すり鉢状に掘り込まれている。これよりはほぼ垂直に掘り込まれ、底面は約2.0mの不整形な円形を呈する。井戸枠及びその痕跡は検出できなかったため、井戸を廃棄する際に取り扱われたものと思われる。

埋土は8層に分かれ、1層灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト、2層黄灰色(2.5Y5/1)粘質シルト、3層褐灰色(10YR6/1)砂混じり粘質シルトと黄褐色(10YR5/2)粘土のブロック土、4層褐灰色(7.5YR5/1)粘土、5層褐灰色(7.5YR6/1)粘土、6層褐灰色(10YR5/1)砂混じり粘質シルト、7層灰色(5Y4/1)粘土と灰色(5Y5/1)粘土の互層、8層灰色(7.5Y4/1)粘土である。須恵器、土師器、木片等が出土したがそのうち16点を図化した(第24図 図版6)。

(6) 落込み

今回の調査で、6区、12区で地山面が一段下がる部分があった。深さは約0.15mで埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトである。この層からは奈良時代の須恵器、土師器のみが出土しており、地山直上にはほぼ関係の須恵器杯身、杯蓋、土師器杯が出土した。このため、当初は第3層として遺物を取り上げていたが、遺構として扱うこととした。多くの須恵器、土師器が出土したがそのうち18点を図化した(第25図 図版7)。

3. 遺物**(1) 遺構出土の遺物**

遺構から出土した遺物は須恵器、土師器等であるが、図化できるものは少なかった(第23～25図 図版5～8上)。

1、2は溝39から出土した須恵器杯である。いずれも高台がないものである。3は溝73から出土した須恵器杯の底部である。4、5はいずれも土師器杯である。6は土坑70から出土した須恵器杯の底部である。7から10は土坑70から出土した。7は土師器鉢、8・9・10須恵器杯である。11は土坑87から出土した高台のある須恵器杯である。12はピット51から出土した須恵器である。13はピット13から出土した須恵器杯の高台部である。14・15はピット124から出土した土師器高杯の脚部である。

16から31は、井戸66から出土した。16から23はいずれも須恵器杯である。すべて高台部をもつ。24・25は須恵器杯蓋である。27から29は、土師器甕である。30は木製品である。ほぞ穴が認められるが、用途は不明である。

31は須恵器杯身である。高台のある杯で底部に「新」の墨書が認められた。完形でないため、これ以外の墨書が記されていたかは不明である。

32から46は、落込みから出土した。32から34は土師器杯である。35から38は須恵器杯である。39から41は須恵器杯蓋である。42は須恵器高杯の杯部である。43は須恵器壺の胴部である。44は須恵器壺の口頸部である。45は土師器高杯の脚部である。46は土師器たこ壺である。47は土師器甕である。

(2) 包含層出土の遺物

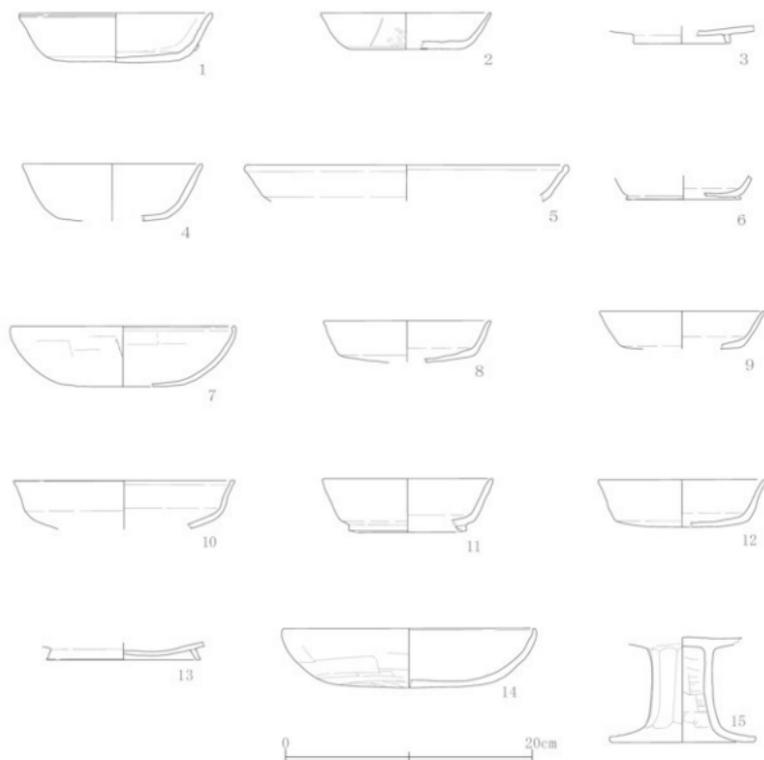
取り上げ1層、2層として取り上げた遺物は瓦器、須恵器、土師器、磁器、サヌカイト薄片等があるが、

細片で図化できるものは少なかった（第26図 図版8下）。

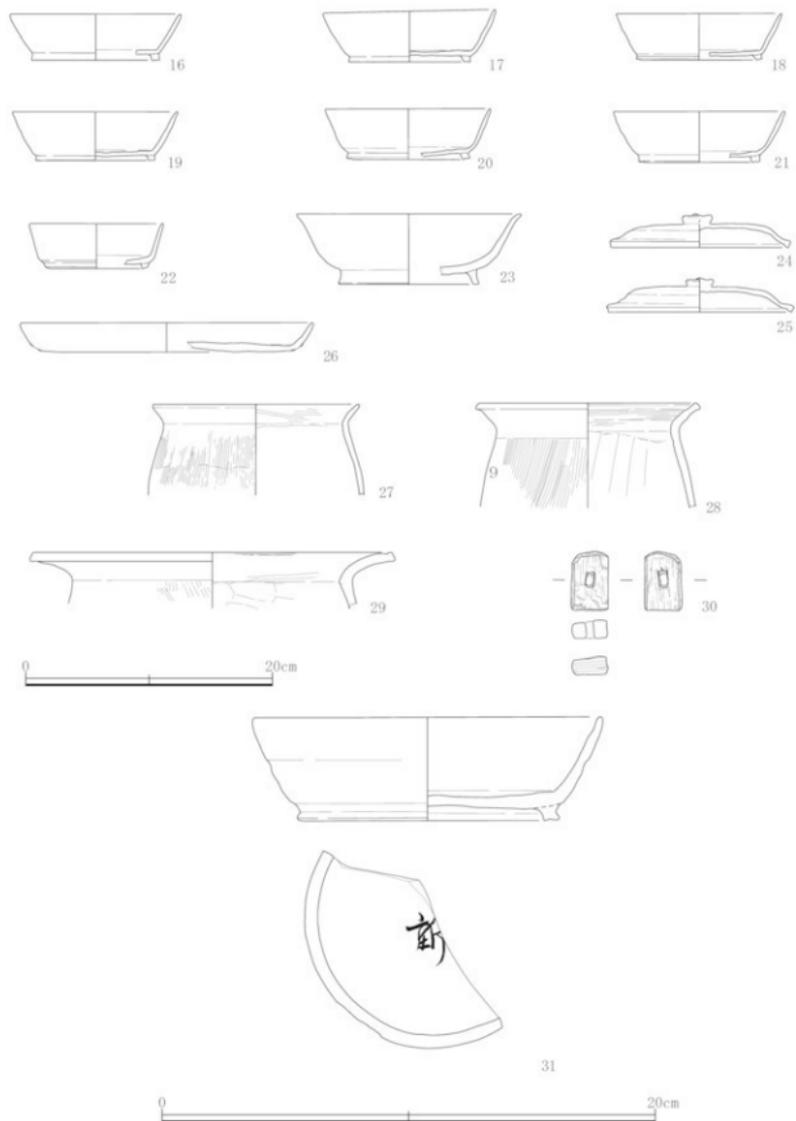
48は取り上げ1層から出土した土鍾、49・50は取り上げ2層から出土した土鍾である。51は青磁碗の高台部である。また、図化できなかったが青磁碗の口縁部が3点出土している（図版8下①～③）。52は取上げ2層から出土したたこ壺である。53は取り上げ2層から出土した砥石である。56は取上げ2層から出土した北宋銭である元豊通宝である。

これらの他に、サヌカイト製の剥片が4点出土している。55はサヌカイトの縦長薄片で右側縁部に2次加工が認められる。56はサヌカイトの横長薄片で左側縁部に2次加工が認められる。57はサヌカイトの石核である。58は土坑33から出土したサヌカイトの横長薄片である。

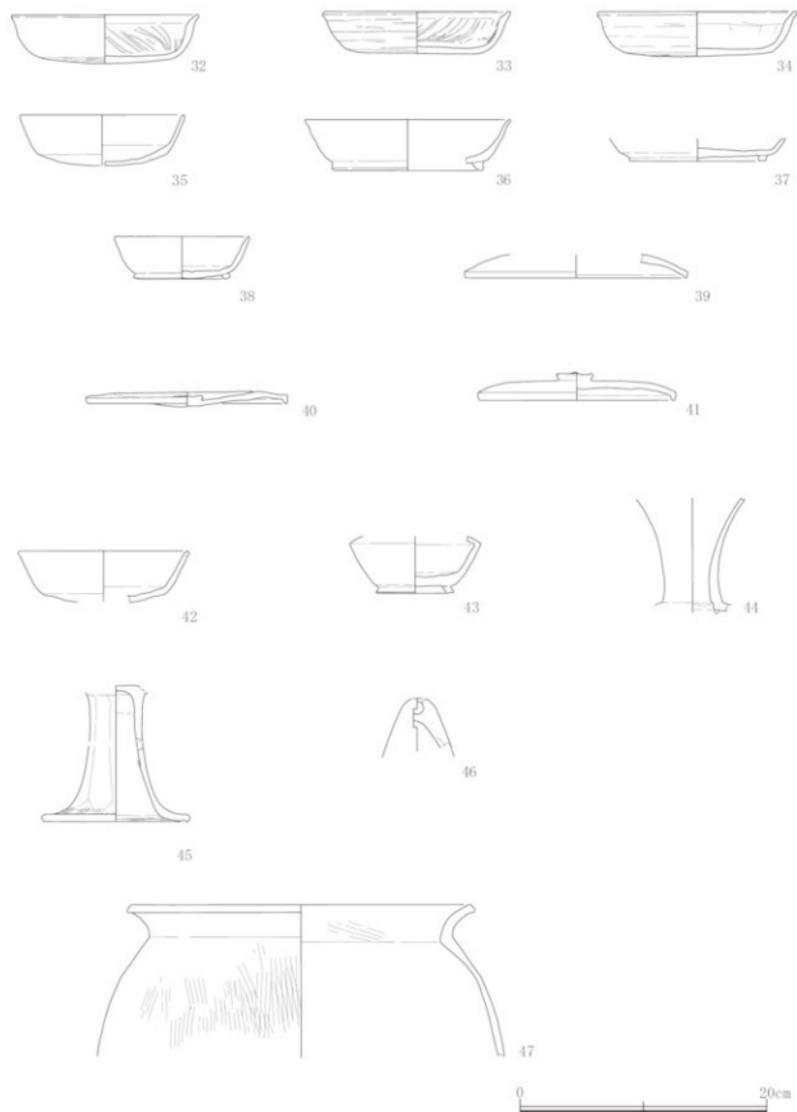
56は地山にめり込むような形で出土したため、調査終了後に地山を掘削したが石器等は出土しなかった。



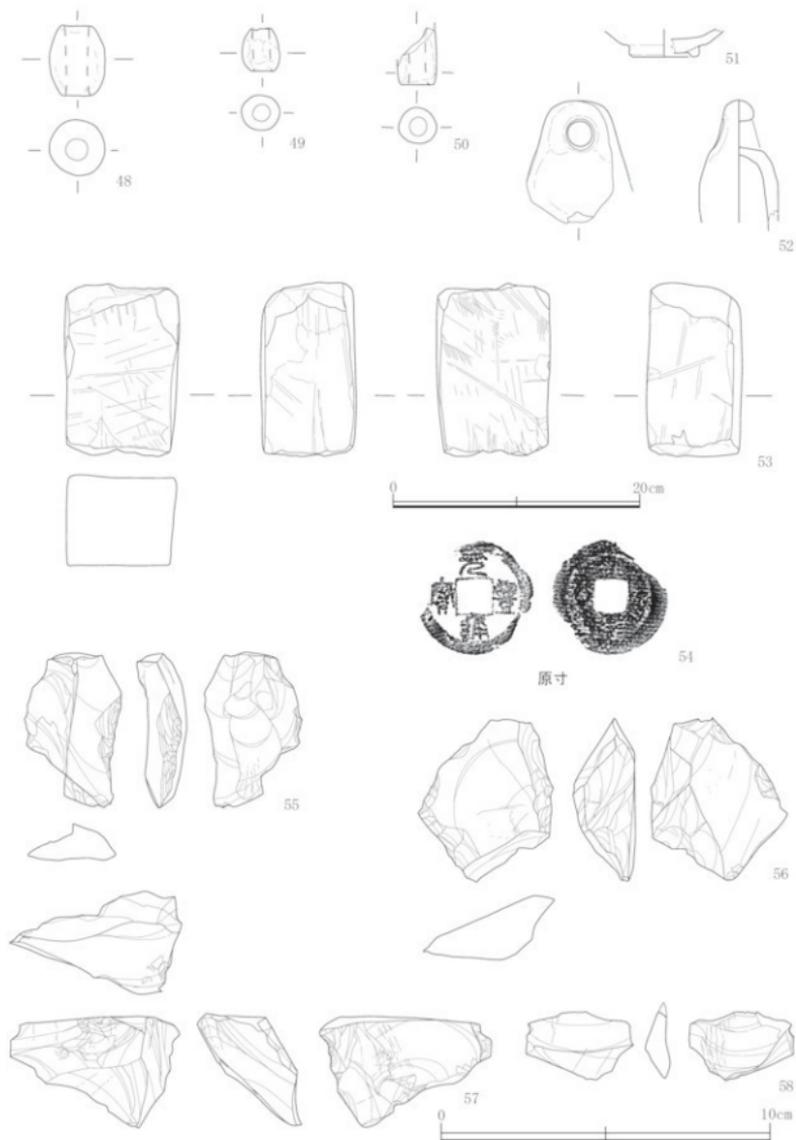
第23図 遺構内出土遺物



第24図 井戸66出土遺物



第25図 落込み出土遺物

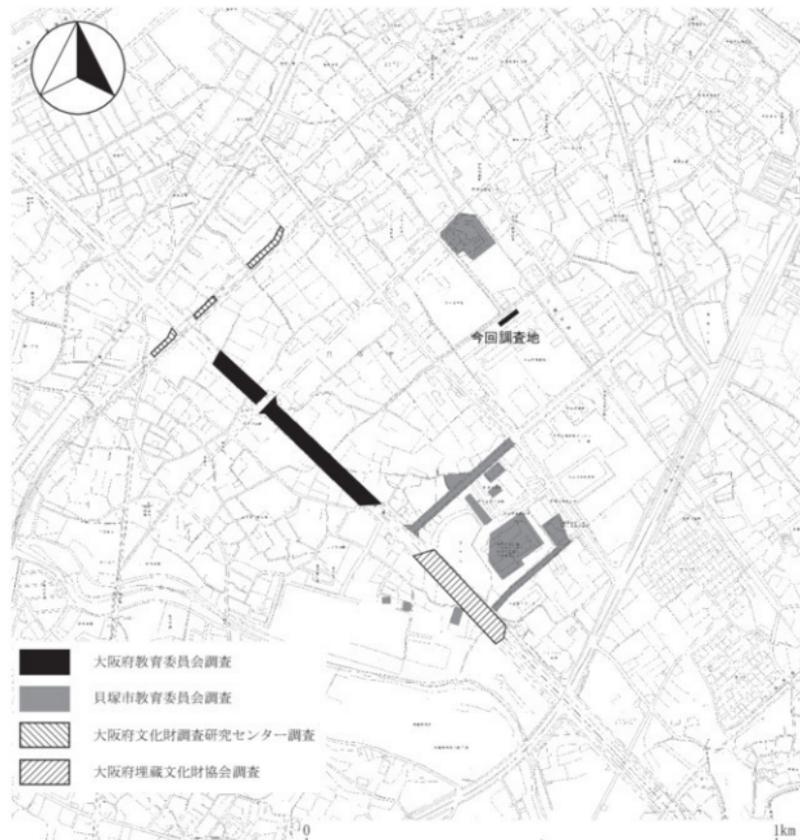


第26図 包含層出土遺物

第3章 まとめ

加治・神前・畠中遺跡では、これまでに大阪府教育委員会、貝塚市教育委員会、財団法人大阪府埋蔵文化財協会、財団法人大阪府文化財調査研究センター（両財団とも現公益財団法人大阪府文化財センター）が発掘調査を実施してきている。その中で主要な調査地点を第27図にまとめた。

本遺跡で初めて大規模な発掘調査が実施されたのは主要地方道貝塚中央線建設に伴う発掘調査である。この調査以後、大阪府文化財協会、大阪府文化財調査研究センターが引き続き貝塚中央線関連の発掘調査を実施している。また、貝塚市教育委員会は、市役所周辺において発掘調査を実施している。こ



第27図 周辺発掘調査位置図

の結果、加治・神前・高中遺跡では、縄文時代から中世に至るまでの複合遺跡であることが明らかになりつつある。

今回の発掘調査では、奈良時代の掘立柱建物跡や溝、井戸等を検出した。このなかで掘立柱建物や溝の方向は、ほぼ東西南北であり、東西南北を基準とした地割を用いていたことが考えられる。

一方現在の調査地周辺の地割は、海岸線や近木川、津田川などの自然地形を基準としている。このような地割になったのは、周辺の調査結果から中世（13世紀）以降のことと考えられている。

それでは、この東西南北を基準とした地割はどのように形成されていたのであろうか。今回の調査地の南約400mにあたる市役所周辺の発掘調査でも奈良時代の東西南北を基準とした掘立柱建物や道状遺構、短軸4m、長軸4.5m、深さ1.8mの井戸などを検出している。大阪府教育委員会が調査した、貝塚中央線建設に伴う発掘調査でも平安時代の掘立柱建物跡を検出している。

また、貝塚市教育委員会の調査では、円面硯や石帯が出土している。市教育委員会では、検出した建物の規模や、出土遺物から考えると、市役所周辺の調査地は、単なる集落ではなく何か官衙的な性格を持つ遺跡であったと考えられる。

府立貝塚高等学校の発掘調査で検出した掘立柱建物跡や井戸、また「新」と墨書された杯が出土したことは、市役所周辺の調査結果と比べても何ら遜色なく、官衙的な性格を持つ遺跡の範囲がこの地域まで広がっていたことが確認できた。

調査地周辺は奈良時代には和泉国日根郡近木郷（いずみのくにひねぐんごぎょう）と呼ばれていたことが明らかとなっている。また、検出した遺構が官衙的な性格をもつことから、市役所周辺から貝塚高等学校周辺が近木郷の中心的位置を占めていたのではないかと考えられ、これらの調査で、近木郷の様相の一端を明らかにすることができたといえるであろう。

引用参考文献

- 大阪府教育委員会委 1978 『高中遺跡発掘調査概要・1 貝塚市高中所在』 大阪府文化財調査概要 1977
- 貝塚市教育委員会 1988 『加治神前高中遺跡発掘調査概要 都市計画道路鳥羽島中線建設に伴う発掘調査』
- 貝塚市教育委員会 1991 『加治神前高中遺跡発掘調査概要 都市計画道路鳥羽島中線建設に伴う発掘調査』 貝塚市埋蔵文化財報告第20集
- 貝塚市教育委員会 1988 『加治神前高中遺跡発掘調査概要』 貝塚市埋蔵文化財報告第21集
- 貝塚市教育委員会 1993 『加治神前高中遺跡発掘調査概要—仮称市民文化会館の調査—』 貝塚市埋蔵文化財報告第26集
- 貝塚市教育委員会 1993 『加治神前高中遺跡発掘調査概要—市庁舎第2別館建設に伴う発掘調査—』 貝塚市埋蔵文化財報告第27集
- 貝塚市教育委員会 1993 『加治・神前・高中遺跡発掘調査概要—都市計画道路文化会館山手線建設に伴う発掘調査—』 貝塚市埋蔵文化財報告第30集
- 貝塚市教育委員会 1996 『加治・神前・高中遺跡発掘調査概要—保険合同庁舎建設に伴う発掘調査—』 貝塚市埋蔵文化財報告第36集
- 貝塚市教育委員会 1997 『加治・神前・高中遺跡発掘調査概要』 貝塚市埋蔵文化財報告第42集
- 貝塚市教育委員会 2001 『加治・神前・高中遺跡発掘調査概要9—貝塚中央線南海本線単独立体交差化工事に伴う側道建設工事の発掘調査—』 貝塚市埋蔵文化財報告第57集
- 貝塚市教育委員会 2002 『近木郷を考古学する—役所・寺・街道—』
- 財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1986 『都市計画道路貝塚中央線建設に伴う 高中遺跡—発掘調査報告書—』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第7輯
- 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1997 『加治・神前・高中遺跡II—貝塚中央線・南海単独立体交差化事業に伴う発掘調査報告書—』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第21集

圖 版



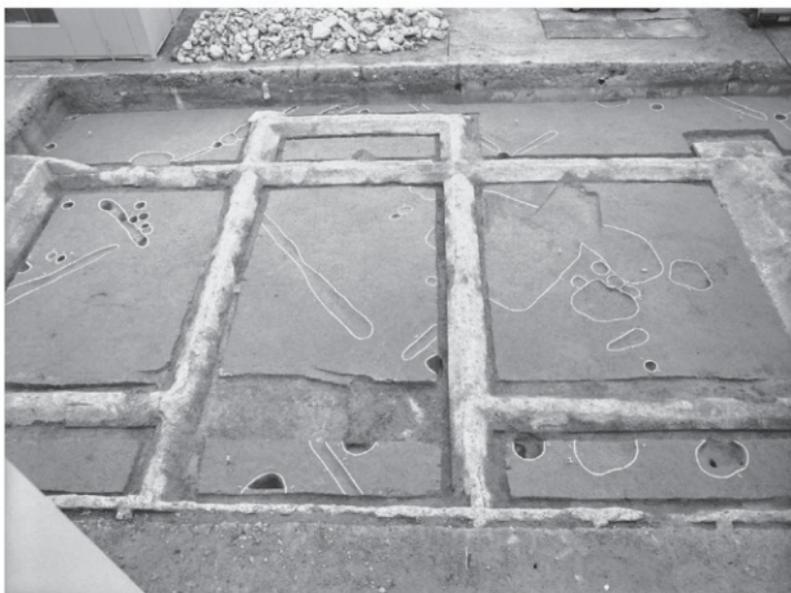
北東部全景(南西から)



南西部全景(北東から)



掘立柱建物跡 1 (北西から)



掘立柱建物跡 2 (南東から)



掘立柱建物跡 3・4、井戸66(北西から)



掘立柱建物跡 5(南東から)

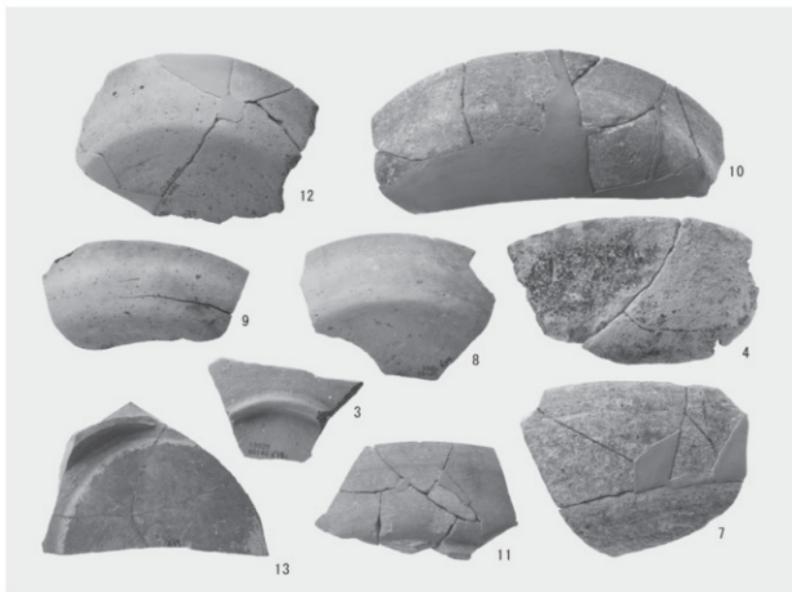


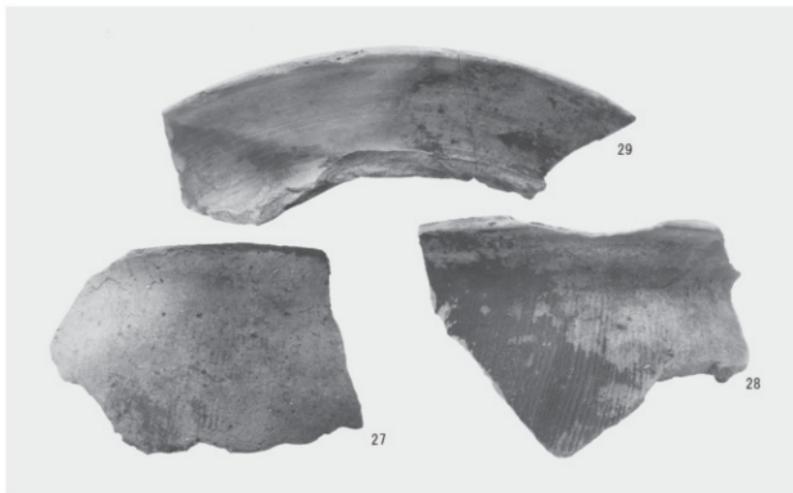
柱穴115 柱検出状況(南東から)



溝39 遺物出土状況(南から)

図版 5
遺物 1
遺構内出土遺物







図版 8 遺物 4 落込み出土遺物(上) 包含層出土遺物(下)



報 告 書 抄 録

ふりがな	かじ・こうざき・はたけなかいせき							
書名	加治・神前・高中遺跡							
副書名	大阪府立貝塚高等学校本館棟改築に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2015-3							
編集著者名	竹原伸次							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351 (代表)							
発行年月日	2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
かじ・こうざき・ 加治・神前・ 高中遺跡	かいづか・し 貝塚市 ひらなかいせき 高中一丁目	27208	23	34° 26′ 27″	135° 21′ 39″	20131101) 20140314	728 m ²	記録 保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
加治・神前・ 高中遺跡	集落跡	奈良時代	掘立柱建物 井戸 溝 土坑		土師器、須恵器		奈良時代の井戸中より「新」と書かれた黒書土器が出土	
要約	奈良時代の掘立柱建物5棟、井戸、溝等を検出した。掘立柱建物、溝の方向はほぼ東西南北を基準としており、現在の地割とは異なっている。 調査地一帯は、奈良時代には和泉国日根郡近木郷と呼ばれており、今回の調査で近木郷の様相の一端を明らかにすることができた。							

大阪府埋蔵文化財調査報告2015-3

加治・神前・畠中遺跡

—大阪府立貝塚高等学校本館棟改築事業に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

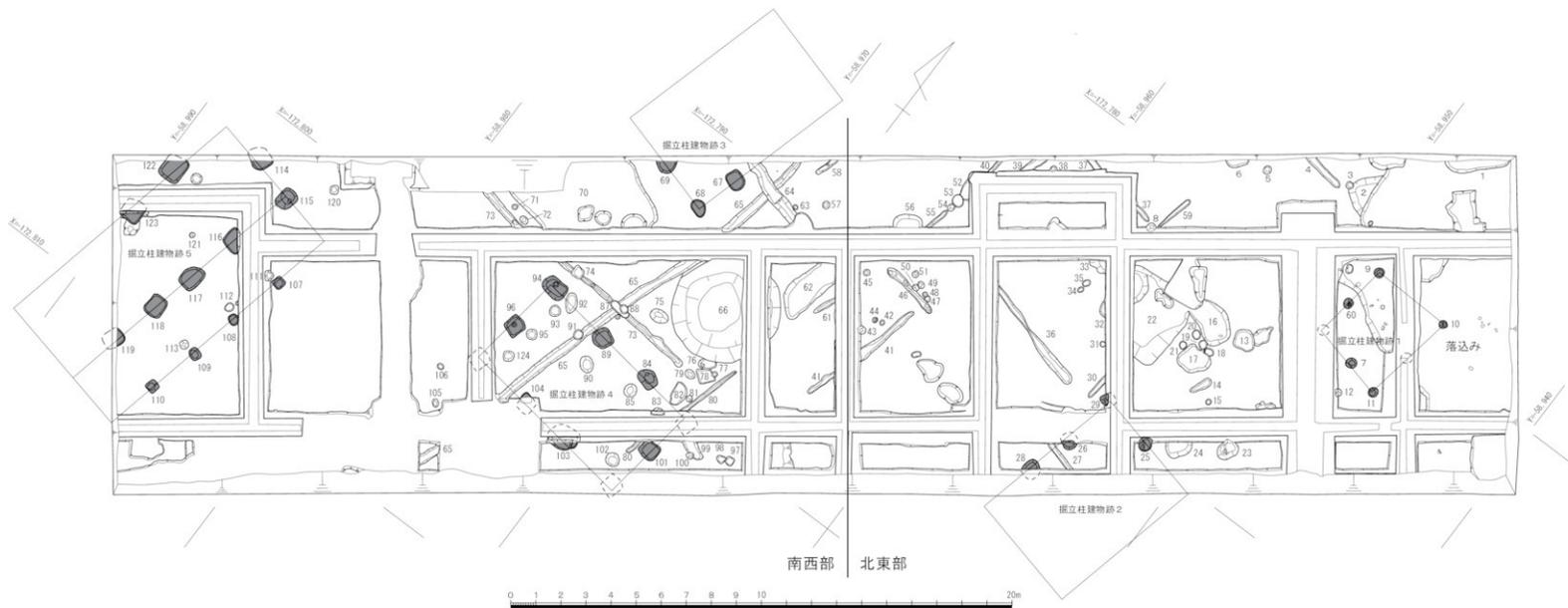
〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351 (代表)

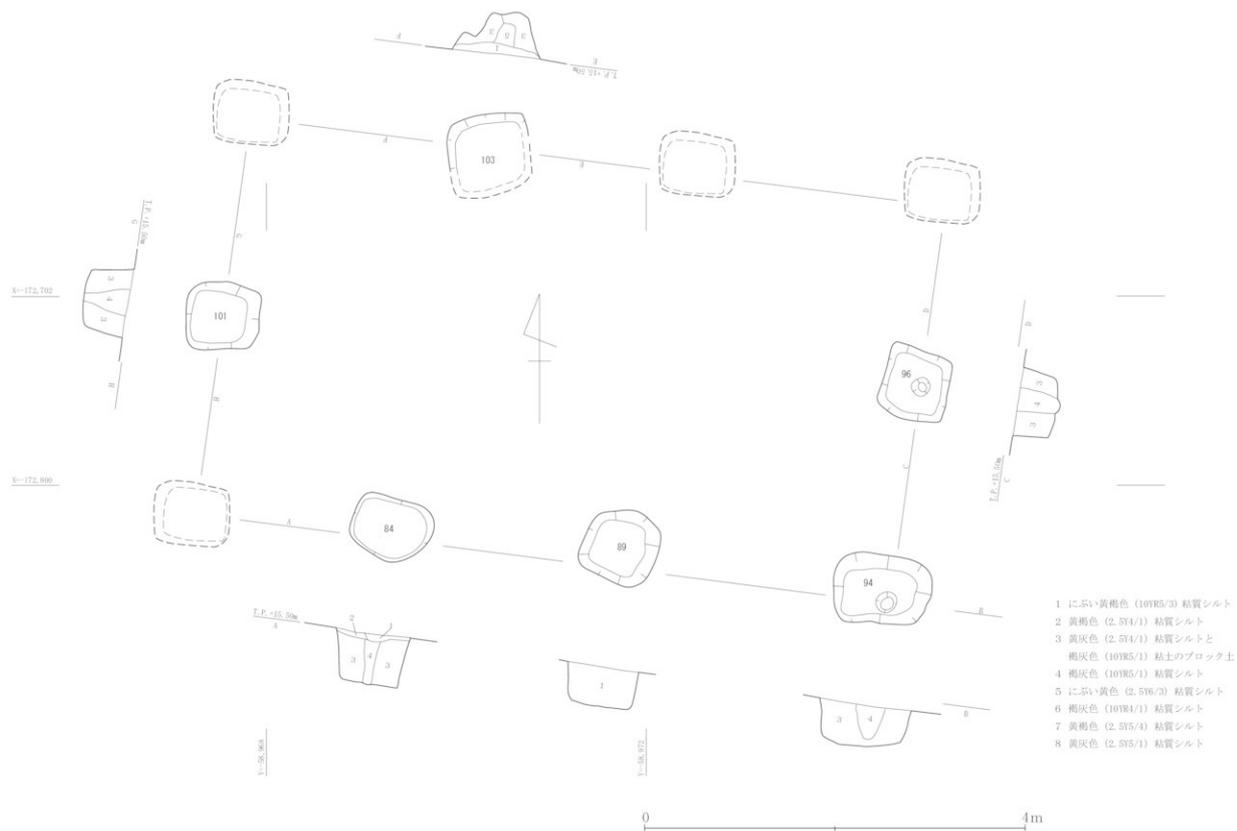
発行日 平成28年3月31日

印刷 有限会社ウエイク

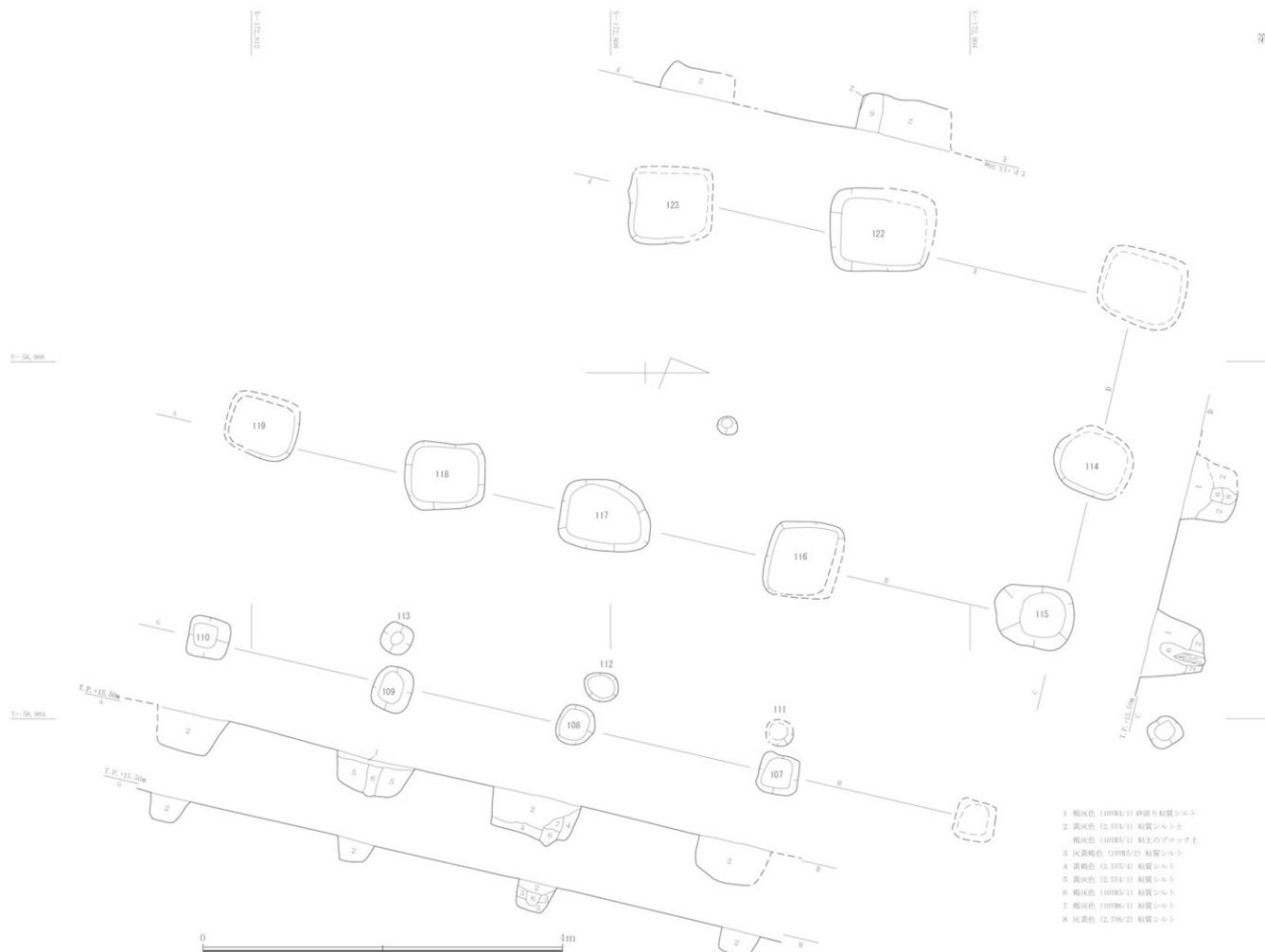
〒537-0001 大阪市東成区深江北2丁目11番36号



第4図 遺構平面図



第9図 掘立柱建物跡4平面・断面図



第10図 掘立柱建物跡5平面・断面図